

北アルプス：唐松岳

◆日程 2022年1月8日（土）～10日（月・祝）

◆メンバー L：OM、MD、OD

2018年1月、我々は唐松岳に臨んだが、強風により撤退を余儀なくされた。いつかリベンジしなければと、4年もの年月が経過していた。

1月8日（土）天候：晴れ

初日は移動がメインである。白馬駅直通の「あずさ」の車窓から、雪を被った甲斐駒や八ヶ岳を見ながらテンションを上げていく。

唐松岳へは白馬八方尾根スキー場からアクセスする。ゴンドラ・リフトと乗り継いでいくが、スキー客ばかりの中で登山者は目立つ。3人とも明らかにテント泊が目当ての大型ザックだからなおさらである。幕営地は八方池山荘から少し上がったトイレ小屋の脇とした。気温も暖かく過ごしやすい陽気で、幕営後も雪洞を掘り、雪遊びを楽しんだ。（記：MD）

CT：八王子駅 8：33 - 白馬駅 11：41 - 八方池山荘 14：00/14：10 - 幕営地 15：00

1月9日（日）天候：雪

風雪がテントをたたき音で目覚める。じっくりと好転を待って、遅くに出発。八方池では「これ以上進んでも何も見えないから」と言ってさわやかに撤退する4人パーティ、その先では「昨日登頂し下ノ樺に幕営した、この上はガス、斜面がどこかわからないくらいだ」と言う充足した様子の単独行者とすれ違った。だが、われわれは進んだ。景色なんて二の次で、前回、撤退を喫した唐松岳に、何としても登りたかったから。

高度をかせぐに連れて、ガスは濃くなり、風は強まる。トレースが消えた。アイゼンをワカンに変えたのは正解だった。12時ちょっと前ころ、丸山ケルンに到着。

私は頂上を狙っていた。「夕方までにテントに戻ればいいさ」「トレースをたどればヘッドンを使っても戻れる」「14時に頂上で、17時にテント着なら御の字だ」「リフトに間に合わなくても予備日を使って朝イチで帰ればOKだろ」そう思っていた。

しかし仲間からは慎重な意見が出た。曰く、「時間切れだ」「トレースは風で消える」「このガスの中でヘッドンは頼りにならない」等々、、、

・・・もつともだった。ちょっと時間をもらって沈思黙考、撤退を決断。「撤退して、明日、予備日を使って登り返そう。」と決断を伝える。われわれは執念深い。唐松岳には2度とも煮え湯を飲まされてきたことになるが、3度まではあきらめない。本日は撤退し、明日に賭けることにした。下山連絡先に予備日を使うことを連絡した。下ってみるとトレースが消えかけていて驚いた。

テントに戻って食糧計画を立て直した。夕飯は炊き込みご飯、カレーライス、魚肉ソーセージ入りのオニオンスープとなり、朝飯はマルタイラーメンに大根の葉とシイタケ（いずれも乾物）が入ることになった。そして、明日は3時起きで5時前にテントを撤収して出発することとし、雪を溶かして水を作ってから寝た。

——かようにわれわれは執念深い。3度まではあきらめない。

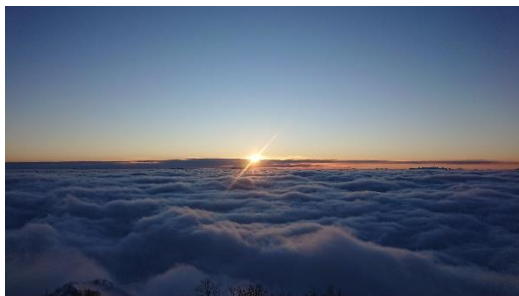
（記：OM）

CT：幕営地 8：30 - 丸山ケルン 11：40/12：00-幕営地 14：40

1月10日(月・祝) 天候：晴れ

3時起き。昨日と違い、テントをたたき雪の音がしないので、安心して外を見たら、細かい雪が音もなく降っている。あまり視界がないが、晴れると信じて支度する。テントも撤収し、用意が整ったのは出発予定の20分前。意気込み充分だ。

昨日の様子から、最初からワカン装着する。まだ暗い中、雪で昨日の我々のトレースも消えている。とにかく八方池を目指そう、とMDさんが合わせてくれたコンパスを頼りに進む。雪深く、膝程度のラッセル。視界が効かず不安になるが、暗い中ケルンが出てきて、間違っていないことを確信。乗るべき尾根も見え、トップ交代しながら進む。気が付くと、星が出ていて、晴れの期待が高まる。下はガスがかかっているが、上は晴れてくれそうだ。夏道ならばカーブして上がっていくところを、様子を見ながら直登する。自分達で道を付けて上がっていくのは、キツイが楽しい。下ノ樺あたりで夜が明け始める。黙々とラッセル交代して上がってきただが、雪はやみ、気付くと眼下に雲が広がっている。雲海、というには少し荒々しい雲だけれど、太陽が上がり、得も言われぬ美しさだ。目の前には誰の踏み跡もない白い山肌が広がり、朝陽を受けて周りの峰々も輝いている。そしてこの壮大な景色は私たち三人の独占なのだ。テンションが上がり、ひと頑張りすると、丸山ケルンの先っちょが見えてきた。すっかり青空だ。風も出てきたが、景色に励まされて登る。



丸山ケルンを過ぎると岩もちらほら出てきて、そろそろアイゼンに変えるかと声上がる。振り返れば歩いてきた我々の足跡が、遠目にもひと足ずつ刻まれているのが見える。小屋の手前で、岩にぶつかる。岩を超えるのか、トラバース気味に巻いていくのか意見が分かれる。足元をなんとか踏み固めながら巻いて通りぬけると、山頂が見えてきた。

フカフカの吹き溜りと格闘して、ようやく山頂碑のもとへ。正真正銘360度の雲一つない絶景だ。4年越し、予備日まで使ったの山頂は白馬、五竜、黒部、遠く富士山八ヶ岳もくっきり望めるご褒美。なによりも、ここまで誰にも会わず、今日の一番乗りであることを喜び合う。雪山に登る、とはこういうことなのか、とストンと胸に落ちた。雪をかぶり、道も踏み跡も無いところを、方角を決め、自分達でラッセルして進むこと。踏み跡を辿るだけでは感じられない充実感。自分達独占の気分最高の山頂は去り難かったが、リフトの時間のタイムリミットがある。名残惜しく振り返りながら下山開始。小屋まで下りると、続々と下から登ってくるのが見える。我々が迷いながらツボ足で抜けたトラバースも、すっかり踏まれて、当たり前の道のようにになっている。それを見て誇らしいと同時に、可笑しくなった。冬の唐松岳に登る、という行為は同じなのに、先行者がいるかないかで、これほど違うものか。山に登る楽しみ、快樂は何の先にあるものなのか、深く感じ入った、文句なく心に残る一番の山行だった。仲間と、登らせてくれた山の神様に、感謝。(記：OD)

CT：幕営地 4：40 - 下ノ樺 6：30 - 丸山ケルン 7：40/7：50 - 唐松岳頂上山荘 10：00 - 唐松岳山頂 10：20 - 幕営地 13：00 - リフト乗り場 13：40